〈資料〉

博学連携によるインターンシップの取り組み

―東海大学×彫刻の森美術館　キュレーターの“たまご”プロジェクトの実践―

篠原聰＊・小林俊樹＊＊

はじめに

これからの学芸員には，専門分野に関する幅広い知識だけでなく，教育能力やコミュニケーション能力，経営能力などが，ますます重要な資質・能力として求められている。大学と博物館が協働して学芸員を養成する体制づくりが必要であること，博物館での一定期間の実務経験を学芸員資格の要件に位置づけることの重要性なども議論されている[1]。学芸員養成のあり方をめぐる近年のこのような議論を踏まえ，東海大学では，2013 年度から彫刻の森美術館との連携に基づき，「東海大学×彫刻の森美術館キュレーターの“たまご”プロジェクト（以下「キュレたま」と省略)」と題するインターンシップの取り組みをスタートした（図 1・2)。


第1000号　東海大学新聞　2013年(平成25年)6月1日(土曜日)

教育の現場から

課程資格教育センターの新たな取り組み

美術館と連携しインターンシップ

未来のキュレーターを育てる

ワークショップを運営

特集 2

聞く

失敗から学んでほしい

彫刻の森美術館 事業部 学芸員 小林俊樹さん

「開かれた博物館」テーマに

6月18日に湘南で公開講座

図 1　東海大学新聞（第 1000 号)」記事（2013 年 6 月 1 日附）


キュレーターを育成

東海大生 美術館で就業体験

特別ワークショップに使用するアクリル板の準備風景

図 2 「日刊工業新聞」記事（2013 年 4 月 26 日附）

＊東海大学課程資格教育センター博物館学研究室　＊＊彫刻の森美術館事業部

尚，前半部（「はじめに」と 1～3 節）は篠原が，後半部（4～6 節と「おわりに」）は小林が執筆した。

同プロジェクトは，文字通り，次世代のミュージアムを担うキュレーター（学芸員）を育成する事業の総称である。学芸員を目指す学生や大学院生が，美術館の教育普及事業等を体験的に学ぶだけでなく，大学側も事前・事後指導をはじめ各種研修会などを実施し，理論と実践の両面から学生の学びをサポートするという内容で，インターンシップの期間は1年間である。インターンたちは，1年間を通じて彫刻の森美術館でワークショップの運営や企画への関与などを通して実務経験を積んでゆく。大学側としては，学事日程への配慮や教育効果を考慮し，1年を4〜5期に分けた短期集中プログラムや，日常業務を中心とする定期的な長期プログラムの策定を提案するなどの工夫のほか，彫刻の森美術館以外の活動場所として幼稚園や医療，福祉との連携も計画している。インターンは，美術館を活動の中心とするこれらのプログラムを実践しつつ，大学企画の研修会等にも定期的に参加し，ミュージアムに関する知識や理論についての理解を深め，それをまた実務経験に反映させてゆくことで，次世代のキュレーターに求められる資質や能力を磨いてゆく。単位認定はなく，法定科目「博物館実習（3単位）」の一部に組み込むなどの措置もとっていない。言い換えれば，参加学生のモチベーション，意識の高さがこのプロジェクト自体を支えているともいえる。本稿は，2013年4月にスタートしたばかりの「キュレたま」の，約半年にわたる実践に関する中間報告であり，担当者レベルでの試案も含まれる。

1. 彫刻の森美術館との連携とインターンシップのあり方をめぐって

彫刻の森美術館は，公益財団法人彫刻の森芸術文化財団が運営するフジサンケイグループ傘下の博物館施設（登録博物館）である[2]。2013年1月，東海大学湘南校舎において，本稿の共同執筆者で「キュレたま」の美術館側の担当者である小林俊樹と打合せの場を設け，「観光地」に立地する「私立」美術館の現状や大学の学芸員養成課程における課題等について議論し，意見交換を行った[3]。その際のディスカッションがこのプロジェクトの発端である。1月中に連携のあり方などを議論し，2月中に具体的な内容を検討，3月に学内説明会を2回実施し，3月下旬に希望者の面接を行うという，やや駆け足のスケジュールで計画を進めた。最終的に15名の学部生・大学院生が現在インターンとして参加している。参加者の学年や学部学科・専攻課程の内訳は表1・2のとおりである（表1・表2）。

いずれも学芸員資格の取得を目指す本学学生もしくは学芸員有資格者の大学院生である。これは，大学・美術館双方の協議に基づく取り決めによるものである[4]。尚，大学近隣の博物館学芸職員1名（非常勤・2011年度に大学院修士課程修了）もプロジェクトに参画している。本プロジェクトにいくつか特色があるとするならば，そのひとつは「キュレたま」の主役である学生が，学芸員課程の開設学部を横断するかたちでインターンのメンバーを構成している点にある[5]。「キュレたま」は，特定の館種（美術館）の学芸員を育成するためだけの事業ではなく，館種を問わず幅広く，次世代を担うキュレーターを育成することも視野にいれて活動を行おうとするものであり，奇しくも，そのような活動を推進するための要因のひとつを，参加学生の多彩な顔ぶれのなかに見ることができるのは幸いであった。後に述べるように，本プロジェクトが，事業の一環として「ユニバーサル・

表1：参加者内訳（学年別）

学部2年生	3名
学部3年生	7名
学部4年生	2名
大学院生	3名
合計	15名

表2：参加者内訳（学部・学科別）

文学部アジア文明学科	1名
文学部アメリカ文明学科	1名
文学部歴史学科考古学専攻	2名
文学部歴史学科西洋史専攻	1名
文学部日本文学科	1名
文学部北欧学科	1名
教養学部芸術学科美術学課程	3名
工学部建築学科	1名
理学部物理学科	1名
大学院芸術学研究科音響芸術専攻	2名
大学院芸術学研究科造形芸術専攻	1名

ミュージアム」などの美術に特化したテーマ以外の公開連続講座の開催や，協力企業訪問などを積極的に実施しているのはそのためである。

ところで，一般的にインターンシップとは「学生が在学中に自らの専攻，将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」「学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度」を指す[6]。美術館においても，将来，美術館で働くことを希望する学生などを対象に，一定期間，現場で学芸業務等を体験的に学ぶ機会を提供する制度として導入が進んでいるが，そのほとんどは，各館が独自にプログラムを実践しているのが現状のようである。美術館が単独で実施しているインターンシップと異なるという意味で，本プロジェクトが大学と美術館との連携による取り組みである点も，「キュレたま」の特色の一つと言えるかもしれない。

先行研究によると，2000 年代に入って以降，美術館においてインターンシップを導入する事例が増えている。指定管理者制度に伴う人件費削減による美術館学芸員の非正規雇用の増加，美術館における学芸業務の多様化と教育普及活動への関心の高まりなどの要因のほか，各種メディアなどで美術館学芸員がキュレーターという呼称で華々しく頻繁に紹介されるようになったことも志望者の増大に影響しているようである[7]。いずれにしろ，美術館におけるインターンシップの実態把握は，いまだ十分な形で行われていないのが現状であり，この分野に関する研究の進展を俟ちたい。

さて，インターンシップの導入の背景とは別に，美術館はその目的自体をどのように考えているのか。各館に通低しているのは，将来，美術館の学芸員や学芸職員として働きたい，あるいは働く可能性のある人材の育成に寄与するため，という「目的」である[8]。このことは，各館のインターンの業務内容などをみても明らかである。全体的にインターンの活動領域は，美術館の学芸業務をかなり網羅する形で実施しているようで，受け入れ対象も，おおむね大学院修士課程修了以上の学歴を条件とする館が多い。各業務に関連する分野を専攻していることを指定する館もあり，より目的意識が高く専門分野に長けた学生・院生に絞ってインターンを受け入れようとする館側の意識を読み取ることができるなども指摘されている[9]。

キャリア教育の一環として，将来，博物館のなかでも美術に特化した「美術館」で働くことを希望する学生，しかも立体作品や屋外彫刻に興味関心がある学生などに，美術館の現場で実務経験を積む機会を提供する――仮に，彫刻の森美術館が単独でインターンシップを策定するならば，同様にこのような目的を掲げていたかもしれない。そしてまた，美術館は大学と連携することにより，上記「目的」を達成するべく，より専門性を重視した高度なインターンシッププログラムを策定することが可能かもしれない。無論，筆者はそのような連携のあり方を否定するわけではないし，学芸員養成をめぐる近年の動向からすれば，むしろ推進するべきとも考えている。しかしながら，「キュレたま」発端のディスカッション――経理などの実務経験者でもあるという異色の経歴を持つ担当者との意見交換のなかでみえてきたのは，館種を問わず幅広く，次世代を担うキュレーターを育成することを視野に入れた「実践」の重要性であった。

美術館のインターンシップである以上，美術に関する専門的知識や技術のスキルアップが前提となるのは当然だが，同時に，館種を問わず，学芸員に求められる「現場力」や「実践力」の底上げ，すなわち，コミュニケーション能力や，学芸業務全般に通底するマネジメントに関する能力なども重視し，その「育成」に力を入れること。学年も，学部学科も異なるインターン一人ひとりの「個人差」を肯定的に受け止め，尊重すること。画一的，規格的なフォーマルな教育ではなく，「遊び」の要素も重視したインフォーマルな教育のあり方を目指すこと。ミュージアムにおける「学び」が人それぞれ異なるのと同様に，インターンの「能動性」を重視し，一人ひとりの「良さ」を伸ばす学びの現場づくりを心掛けること。インターンのモチベーションを高める「工夫」を凝らすこと。導入初年度の当面の目的は，“たまご”の理想形を描くのではなく，プロジェクトを実践する上で重要な点を見極め，望ましいあり方を模索する，というのが，大学・美術館双方の担当者が暗黙の裡に形成していた共通認識であったように思う。平たく言えば，それは，ミュージアム氷河期を乗り切ることができるだけの「創造力」「現場力」「実践力」「社会力」を育成する仕組みを構築する試みである。

2. 大学における「学びの“広場”」の取り組みについて

「はじめに」でも述べた通り，本事業の大枠は，学芸員を目指す学生や大学院生が，美術館の教育普及事業等を体験的に学ぶだけでなく，大学側も各種研修会などを実施し，理論と実践の両面から学生の学びをサポートするという内容である。まず，大学・美術館双方の共通認識として，「キュレたま」の活動内容は，大きく2つに分けることができる。美術館をインターンの主な活動の舞台とする「学びの“現場”」と，大学が中心となって企画する各種講座や研修会などの「学びの“広場”」である。この2つの柱を中心に事業を展開している。表3・表4は，4月からスタートした事業の，ここ半年あまりの主な活動内容をそれぞれ一覧にしたものである。

本節では大学企画の「学びの“広場”」の公開連続講座について報告する。公開連続講座の対象は，インターンだけでなく学芸員の資格取得を目指す学生全体である。東海大学はセメスター制度を導入しており，学芸員資格取得に必要な法定科目は第1セメスター（1年生の春学期）からの履修登録が可能である。したがって，大学に入学したばかりの1年生も連続的に参加している。参加無料，申込不要のため上記以外の学生や一般の参加も可能である。

第1弾では「だれもが楽しめる博物館をめざして――『ユニバーサル・ミュージアム』の理論と実践」というテーマを取り上げた[10]。「ユニバーサル・ミュージアム」の実践的研究に取り組んでいる3人の講師を招き「だれもが楽しめる博物館」の具体像に迫るという内容である。13歳の時に失明し，その後，京都大学を経て同大学院で文学博士号を取得，現在は国立民族学博物館〔以下，民博と省略〕准教授の広瀬浩二郎を講師に招いた[11]。参加者は学生を中心に，他大学の大学院生や博物館関係者，医科大学の教員，チラシの点訳にご協力頂いた秦野市点訳赤十字奉仕団の方々など，300名程度であった（図3・4）。

「世界をさわる手法を求めて～“手学問”が博物館を変える！」と題する講演の前半は，盲学校時代のエピソードや民博の「世界をさわる」展示コーナーの実現の経緯について，後半は彼が提唱する“手学問”の理論と実践について，わかりやすく語っていただいた。「健常者」と「視覚障がい者」という常識に対して，「見常者＝視覚に依拠して生活する人」と「触常者＝触覚に依拠して生活する人」という考え方を提唱する広瀬は，民博での10年を振り返るなかで，「さわる展示」の取り組みが晴眼者による視覚障がい者の支援としてではなく，「見常者」と「触常者」との異文化間のコミュニケーションの場としても重要であることを強調した。

表3：学びの「広場」

タイトル	日時・場所	参加者人数
公開連続講座第1弾 だれもが楽しめる博物館をめざして ――『ユニバーサル・ミュージアム』の理論と実践 第1回：広瀬浩二郎（国立民族学博物館准教授） 「世界をさわる手法を求めて　～“手学問”が博物館を変える！」	6/16・5時限目 東海大学 湘南校舎 11-206教室	学芸員課程の学生を中心に，秦野市点訳赤十字奉仕団の方，一般の方，医科大学教員，博物館関係者等 計300名程度
公開連続講座第1弾 だれもが楽しめる博物館をめざして ――『ユニバーサル・ミュージアム』の理論と実践 第2回：斉藤名穂（デザイナー/建築家） 「目の見える人と見えない人が一緒に読む地図 ～触知図制作の現場から」	7/18・5時限目 東海大学 湘南校舎 11-206教室	学芸員課程の学生を中心に，秦野市点訳赤十字奉仕団の方，一般の方，博物館関係者，美術館学芸員等 計150名程度
キュレーターの“たまご”プロジェクト連続講座　特別編 ミニシンポジウム「森のスケッチブックができるまで」 パネラー：今井俊隆（マルマン株式会社　企画） ：五十嵐亮（マルマン株式会社　営業） ：のぐちようこ（デザイナー） 司会：小林俊樹（彫刻の森美術館）	8/30・3時限目 東海大学 湘南校舎 11-303教室	インターンを中心に大学職員，幼稚園関係者等 計15名程度

表 4：学びの「現場」※インターン（参加者数）は期間中の延べ人数（ワークショップ）。事前準備等の活動も含む。

活動内容など	期間	日数	インターン
①企業訪問 引率：小林俊樹（彫刻の森美術館） 訪問先：アクリサンデー株式会社（豊島区池袋） 訪問先：マルナン株式会社（渋谷区道玄坂）	4/12（金）	1 日	2 名
②春の特別ワークショップ第 1 弾 ブロンズペンダント 会場：彫刻の森美術館・森のアトリエ 3F 参加料：1,000 円 講師：伊藤一洋 （有限会社山岸鋳金工房スタッフ・彫刻家） 協力：有限会社山岸鋳金工房，ホルベイン工業株式会社 ホルベイン画材株式会社，マルナン株式会社 家具協力：syoca	4/27（土） ～ 4/29（月・祝）	3 日間 9：00～16：00 （常時受付）	23 名
③春の特別ワークショップ第 2 弾 森のモノクル　―ウョウョメガネで作品をみてみよぅ― 会場：彫刻の森美術館・森のアトリエ 3F 参加料：1,000 円 講師：スサイタカコ（アーティスト） 協力：アクリサンデー株式会社，寺西化学工業株式会社 マルナン株式会社 家具協力：syoca	5/3（金・祝） ～ 5/6（月・祝）	4 日間 9：00～16：00 （常時受付）	23 名
④インターン報告・反省会 統括：小林俊樹（彫刻の森美術館）・篠原聰（東海大学） 第 1 期（春の特別ワークショップ）の実践について 場所：東海大学湘南校舎 11-303 教室	5/16（木）	1 日 5 時限 16：50～18：20	12 名
⑤「キッズアートプロジェクト」見学・打合せ 引率：篠原聰（東海大学） 見学先：聖マリアンナ医科大学小児科（川崎市宮前区）	6/9（日）	1 日 14：00～16：00	8 名
⑥夏の特別ワークショップ第 1 弾 Painting ビーサン !! 2013 会場：彫刻の森美術館・森のアトリエ 3F 参加料：1,000 円 協力：有限会社ゲンベイ商店・寺西化学工業株式会社	7/13（土） ～ 7/15（月・祝）	3 日間 9：00～16：00 （常時受付）	23 名
⑦企業訪問 引率：小林俊樹（彫刻の森美術館） 訪問先：マルマン株式会社（中野区中央）	7/23（火）	1 日	3 名
⑧夏の特別ワークショップ第 2 弾 森のスケッチブック　―彫刻の森美術館でのスケッチ体験― 会場：彫刻の森美術館・森のアトリエ 3F 参加料：1,000 円 協力：マルマン株式会社・ホルベイン工業株式会社 家具協力：syoca	8/10（土） ～ 8/18（日）	9 日間 9：00～16：00 （常時受付）	50 名
⑨インターン報告・反省会 統括：小林俊樹（彫刻の森美術館）・篠原聰（東海大学） 第 2 期（夏の特別ワークショップ）の実践について 場所：東海大学湘南校舎 11-303 教室	8/30（金）	1 日 10：30～12：00	7 名
⑩企業訪問 引率：小林俊樹（彫刻の森美術館） 株式会社エムアンドビーデザイン（渋谷区桜丘町）	9/2（金）	1 日 10：30～12：00	1 名
⑪企業訪問 引率：小林俊樹（彫刻の森美術館） 訪問先：ハミィ株式会社（小田原市栄町）	9/6（火）	1 日	6 名

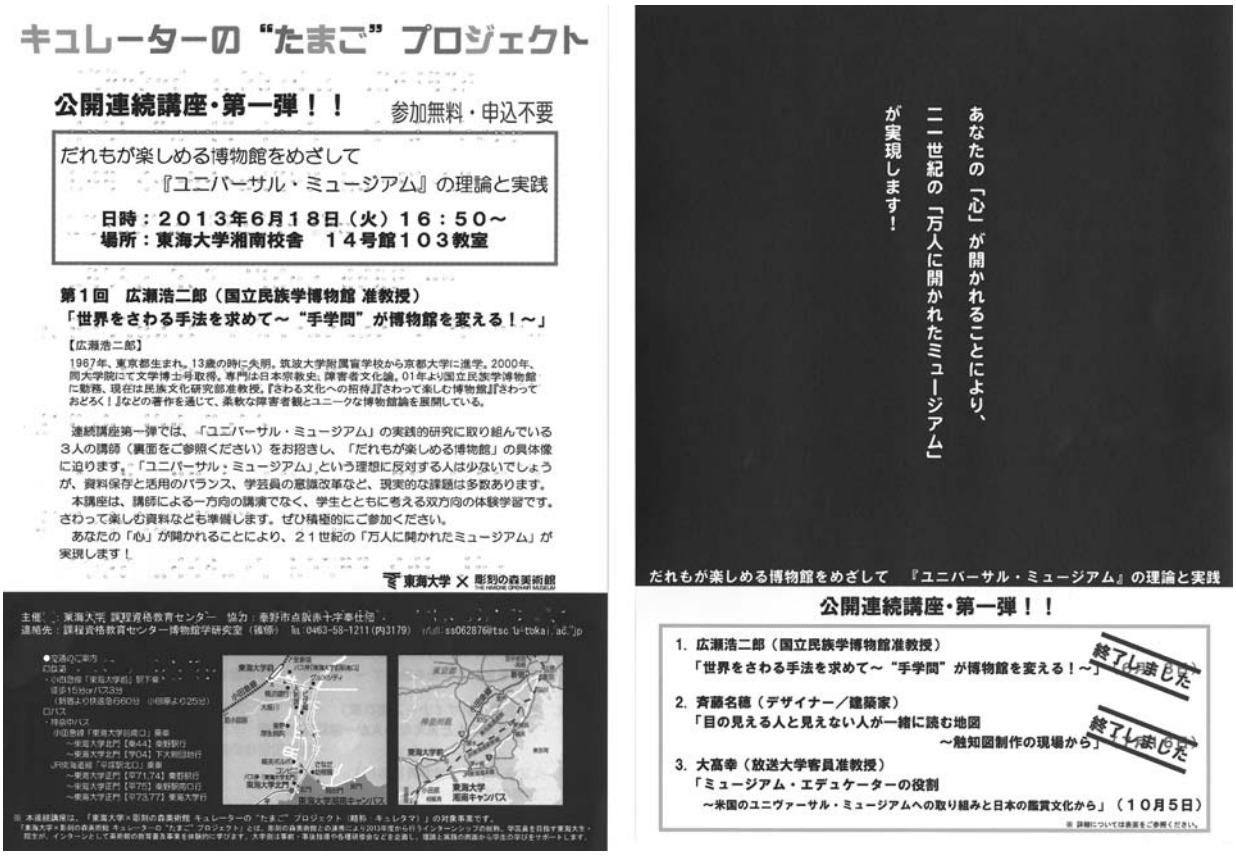

図３　公開連続講座第１弾チラシ（表・裏）・点字表記は秦野市点訳赤十字奉仕団の協力による



図４　ユニバーサル・ミュージアムについて語る広瀬浩二郎氏（第１回）

“手学問”の理解には，①**考**―質感・機能・形状を確かめる（民族資料の触察），②**交**―身体感覚を研ぎ澄まして“音”にさわる（「文字を使わない」ex. 琵琶法師の物語を全身で味わう），③**耕**―触覚の潜在能力を掘り起こす（点字の触読）という３つのキーワードが重要である。“さわる”おもしろさや豊かさを触常者から発信することの意義を説き，自ら「見る講演」でなく「さわる講演」を試みる彼の熱意から，学生たちは，①**優しく**資料を取り扱うことが，モノの背後にある文化や作者に対する敬愛の念を育み，②**ゆっくり**時間をかけて鑑賞するこ



図 5　点字表記の名刺を作成するインターンたち



図 6　会場の視覚障がい者と触れ合う斉藤名穂氏（第 2 回講演）

とにより，点を線，面，立体にする能動的触学・触楽の醍醐味を味わうことができ，③**洋々たる**想像力と創造力を発揮してモノと対話することが，「目に見えない」世界のリアリティを実感できる愕きを切り拓くことにつながる――“手学問”を実践する上で大切なポイントを，身をもって学んでくれたようである。

「“手学問”は目が見えない人のためだけではなく，視覚情報に頼りきっている現代人のためにある」，「情報化社会，スピード重視の世の中だからこそ，じっくり時間をかけて“物”と対話することが大切」などの学生のコメントだけでなく，「私は目が見えないわけではないし，耳が聞こえないわけでもありません。それが普通だと思って，今まで何の違和感もなく博物館や美術館を見学してきました。しかし，世の中には広瀬さんのように目が見えない人がいる。私は少しそのことを忘れていました」，「一人の人間として，尊敬できる方であった」といった感想も寄せられたのは，主催者にとって嬉しい限りである。現代社会が急速に失いつつある寛容な精神や人間教育の場など，大学教育のあり方にも想いを馳せる機会となった。終了後の懇親会にも，インターンをはじめ多くの方々に参加いただいた。インターンたちは，事前に自己アピールの一文を記した点字表記の名刺を作成し，おもいおもいに講演者との交流を深めた（図 5）。

第 2 回の講演は，斉藤名穂「目の見える人と見えない人が一緒に読む地図～触知図制作の現場から」で，「だれもが楽しめる博物館」の実践編である[12]。東京国立博物館の触知図や「赤のさわるコレクション（群馬県立近代美術館）」などの仕事で知られる斉藤は，ミュージアムと人を繋ぐ新たな架け橋として，「さわる」という営為の可能性を切り拓くデザイナー・建築家である。前回同様，参加者は学生を中心に点訳赤十字奉仕団の方々，他大学の学生，美術館学芸員など，150 名程度であった（図 6）。

「“触知図”というテーマは，健常者なら普段は見過ごしてしまうことだったので，とても新鮮でした。日本が触知図の先進国であることも知りませんでした」「道の案内をする“地図”としての役割だけでなく，景色を知ることができたり，美術館や博物館の各展示室のモチーフ（イメージ）を伝えることもできたりするということがあるから“知図”なのだと気づくことができた」など，学生の感想には触知図についてのみならず，「広瀬さんの時とは少し違い，作り手の側から見ることができました。ただの地図でなく，触ることのできる作品という感じがします」「触知図は誰かが機械的に作ったものだと考えていましたが，お話を聞いて，1 つ 1 つに想いがこもっていると感じました」「前回の講座のときにも増して，触って得られる情報はとても多いのだなと思いました」「目の見える人と見えない人が一緒に触知図を見たとして，もしかしたら，より多くのことを感じられるのは後者なかもしれない」「見えるとか見えないとかにすごく大きな壁はなくて，お互いにその感覚を共有できるのだと思った」「全ての人に開かれた博物館という考えは忘れてはいけないものだと再認識した」など，テーマとの関連性や理解の深化がみられる声が寄せられた。

触知図デザインに斉藤を向かわせた原風景でもある「ご友人の手紙の内容がとても心に残るきれいな世界を見ているような気がしました」というコメントをはじめ，彼女の仕事に対する情熱や人生哲学，それに対する学生の反応なども多数寄せられた。「斉藤さんのお話を聞き，自分のビジョンを広げることの大切さを私は感じとり

ました。私は歴史学科の西洋史専攻で，海外への留学を考えています。ですから，フィンランドのお話を聞いて，少し留学への道を後押ししていただいたような気分になりました」「触知図を手がけるきっかけとなったのが大学時代のことであったと聞いて，私はこれからの大学生活の中で将来の仕事に携わる為のアイディアを見つけていく作業をしていかなければならないと感じました」「フィンランドへの留学や好きなデザイナーの話を聞き，好きだけで終わらせないで，行動するのが大切だと思いました。好きな事が誰かのために役立ち仕事にできている斉藤さんは，とても格好良く，羨ましい」「『ぼくたちもきていいんだな』と思ったと障がいのある人が言っていたというのを聞いて，少しかなしかった。ユニバーサル・ミュージアムの必要性を感じました。斉藤さんの，悩みながら一番いいと思うことを人と協力しながら実現していくために努力する，という姿勢はすごいなと思いました」「制作している側の楽しさが伝わりました。自分の作るものへの情熱，そして自分が作ったものが他の人やものにどのような影響を与えていくか，そのためにどうすべきか，作り，楽しみ，考え，悩む，私も斉藤さんのように人生の芯となるようなものを見つけて生きていきたい」。

尚，第 3 回の講演には，大髙幸「ミュージアム・エデュケーターの役割～米国のユニバーサル・ミュージアムへの取り組みと日本の鑑賞文化から」を予定している（2013 年 10 月 5 日に開催）[13]。

さて，公開連続講座の第 1 弾のテーマに「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」を取り上げたのは，当該テーマが，館種を問わず，次世代のミュージアムにおいて検討すべき重要な課題であり，キュレーターが中心となって，現場での実践を通じて推進するべきテーマであると考えたからである[14]。「ユニバーサル・ミュージアム」という理想に反対する人は少ないだろうが，資料保存と活用のバランス，学芸員の意識改革など，現実的な課題は数多く存在する。別の角度からみれば，次のような視点も重要であろう。第 4 回ミュージアムサミット（2010 年開催）の米仏の事例報告では，移民社会，格差や貧困など社会が抱える問題について，美術館がある種のソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）を行う社会装置としても機能していることが言及された。これを受けて美山良夫は，ダボス会議で取り上げられるような重要な問題，グローバル・アジェンダ（世界規模で直面している貧困・環境・人権などの問題），差別の問題，政治的対立の問題，経済危機も含め，世界が抱えている様々な問題に対して，ミュージアムは何ができるのか，無力なのか，企業や研究機関，政府にできないことでミュージアムができることは何があるのか，そのような視点でミュージアムを考えることの重要性を指摘している[15]。これらの視点も踏まえ，今後，大学企画の「学びの“広場”」では，次世代のキュレーターを育成するべく，ユニバーサル・ミュージアムの延長線上に，グローバル・アジェンダやソーシャル・インクルージョンといったキーワードを位置づけ，それらに関連するテーマを取り上げた公開連続講座なども継続的に開催するつもりである[16]。

3.「学びの“広場”」の今後の展開について

秋以降には，公開連続講座第 2 弾を計画している。第 2 弾のテーマは「メディアとミュージアム　～アートを魅せる・繋ぐ・みつける」で，講師陣には「明治悪妻伝説～初代“ハンサムウーマン”新島八重の生涯（歴史秘話ヒストリア）」のディレクターとして「放送と女性ネットワーク賞」の受賞経歴もある押尾由起子（NHK ディレクター），美術展覧会だけでなく数々の文化芸術に関する事業の企画・運営に携わってきた津屋式子（読売新聞事業局文化事業部），美術作品を食の観点から切り取るキュレーターとして TBS 系列局の「情熱大陸」の出演経歴もある林綾野（アート・キッチン）を予定している。

それぞれ，日常のなかに埋もれてしまっているもののなかから新たな価値を発掘し，それをわかりやすく，魅力的に，マスメディアを通じて紹介するという点で共通している。独自の視点から新たな価値を発掘しその魅力を人びとにわかりやすく伝えるテレビ番組を制作する，展覧会事業等を支えつつマスメディアを通じて文化芸術の魅力やそれを育むことの重要性を伝える，アートに秘められた物語を紡ぎだし自らも媒体（メディア）となってその魅力を伝える仕事に携わる――第 2 弾の講演は，次世代のキュレーターに求められる資質や能力，多様化・高度化する社会のニーズに応えるプロデュースやマネジメントのあり方を模索する上でも示唆に富む内容になると考えている。地道な調査研究に基づき資料や作品の新たな価値を見いだし，公開普及活動を通じてその魅

力を伝えるという学芸員の仕事の重要性は今も昔も変わらないが，その仕事のあり方を今一度見つめ直す機会にもなるだろう。

「学びの“現場”」についての詳細は次節以降の小林の論考に譲るが，大学側の提案として，今後の見取り図を示すならば，彫刻の森美術館以外の活動場所として，以下の連携を計画している[17]。

①幼稚園との連携

②病院との連携

③福祉との連携

①は，東海大学付属本田記念幼稚園との連携で，表3「夏の特別ワークショップ第2弾　森のスケッチブック―彫刻の森美術館でのスケッチ体験―」での実践（4節参照）を踏まえた取り組みである。幼稚園を活動の舞台とした新規ワークショップの企画運営などの実践も予定している[18]。②は，聖マリアンナ医科大学小児科のキッズアートプロジェクト――難病で長期入院を強いられている小児患者に，アートを通じて明るさを取り戻し，積極的に治療に向き合ってもらおうという試み――との連携である[19]。医療現場との連携という点を考慮した新たなワークショップの企画立案なども検討中である。③は，秦野市点訳赤十字奉仕団との連携である。点訳に必要な施設設備などをインターンが見学し，同奉仕団の活動についての理解や奉仕団の方々との交流を深めるという内容で，公開連続講座第1弾のスピンオフ企画でもある。

その他，次年度の取り組みとして，「学びの“広場”」では，現在，ミュージアム関連の世界で活躍している本学卒業生などを講師に招いた「ようこそ先輩シリーズ（仮）」や，仕事をはじめて1～5年程度の若手学芸職員による「キュレーターの現在進行形（仮）」などの公開連続講座を予定している。「学びの“現場”」では，引き続き彫刻の森美術館での実践を機軸に，神奈川県立博物館や厚木市郷土資料館等との協力体制を整備し，インターンの実践の場を美術館以外にも拡充してゆく計画である。また，「企業訪問」（5節参照）を継続する一方，作品や資料の修復保存の現場をはじめとする「○○の現場見学」なども企画し，ボランティア育成やギャラリー運営の現場などへの見学研修会も積極的に行う予定である[20]。

大学と美術館との連携によるインターンシップの試みは，はじまったばかりである。前半部のまとめとして約半年の活動を振り返るならば，それは，次世代のキュレーターを育成する仕組みづくりの模索と試みであった。インターンたちの実践からみえてきたのは，「創造力」「現場力」「実践力」「社会力」の育成という使命である。東海大学の一教員としての視点からみればそれは，本学が育成する「4つの力」との親和性も高いように思われる。①自ら考える力（常に未来を見据え，自らが取り組むべき課題を探求する力），②集い力（多様な人びとの力を集結する力），③挑み力（困難かつ大きな課題に勇気を持って挑戦する力），④成し遂げ力（失敗や挫折を繰り返して目標を実現していく力）である[21]。大学と美術館の現場を行き来するなかで実践される本プロジェクトは，東海大学が育成する「4つの力（自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力）」を伸ばす絶好の機会にもなるはずである。

次節以降は「キュレたま」のもう一つの柱である「学びの“現場”」について，美術館側の担当者の小林が報告する。沖縄県立芸術大学・大学院で美術史を研究し，犬島プロジェクトなどにも携わった小林は，アートと社会を切り結ぶために会計の世界に飛び込み，実務経験を積んだのち，美術館経理を経て，現在，教育普及と作品管理を担当する異色の学芸員である。尚，学びの「現場」の雰囲気やインターンたちの等身大の姿を伝えるべく，活動内容や実践の歩みを具体的な事例に即して言及するよう心がけた。

4. 美術館における「学びの“現場”」の取り組みについて

前半の論考を受けて，ここからはインターン達の「学びの“現場”」を美術館側から，その担当者である筆者の視点を通して述べていきたい。ただ，筆者は教育学を専らとしていない為，例えば，類似例との比較などの検証は前半部分を担当した篠原に譲りたい。むしろ本論考そして，本プロジェクトが教育学を専門とされる人々にとっての研究の対象となるような，一例となっていれば幸いである。

4つの特別ワークショップ，春は7日間，夏は12日間，計19日間，この期間を中心に前半のインターンシッ



図7　ブロンズペンダント

プは行われてきた。ちなみに年間の特別ワークショップの実施予定日数は28日間である。その点から見れば，現時点で特別ワークショップ全体の3分の2以上を消化していることになる。ここでは，その中から表4②の「ブロンズペンダント」（以下，②ブロンズペンダント）と⑧の「森のスケッチブック－彫刻の森美術館でのスケッチ体験－」（以下，⑧森のスケッチブック）を取り上げて，特別ワークショップの特徴をさらに掘り下げていきたい（図7・図8）。

②ブロンズペンダントでは，そのタイトルの通り「ブロンズ」に焦点を当てた。ではなぜ，ブロンズに焦点を当てたのか。それについては当館が所蔵する彫刻作品の素材について触れなければならない。所蔵する彫刻作品には様々な素材が使われている。『彫刻の森美術館　美ヶ原高原美術館　ガイドブック』[22]の中に記載されている素材を先頭ページから列挙してみるとブロンズ，ワックス，石膏，鉛，真鍮，ステンレス・スティール，花崗岩，合成樹脂，塗料，鋼鉄，木，大理石，顔料，アルミニウム，亜鉛，鉄。そして，さらに続いていく。実に様々な素材が使われているが，その中でも金属が占める割合が高い。それは当館が主に野外に彫刻作品を展示していることと無関係ではない。野外に展示するということは素材そのものが強固であることを求めているからである。その点において金属が，彫刻作品の素材に選ばれていることが多いのである。その中でもブロンズという素材は多くの作品の素材となっている。彫刻作品だけではなく，絵画作品なども含めた当館のコレクションすべての実に20%以上がブロンズという素材を使って制作されている。その点に注目して企画したのが②ブロンズペンダントというワークショップである。

ワークショップの具体的な内容を紹介すると，参加者は数種類の型から造り出された2 cm大のブロンズをサンドペーパーやワイヤーブラシなどを使って研磨，加工する。それに参加者の任意でアクリル絵具を使い，彩色してもらう。最後に紐を取り付け，ペンダントにするのである。つまり，その造形行為を通して，ブロンズに触れ，彫刻作品の素材への理解を深めるという趣旨を持って企画している。また，このワークショップでは上記の「造形」だけではなく，もうひとつ「体験」に主眼を置いた仕掛けを用意している。仮に造形することに重点を置いた点を「造形のワークショップ」とするなら，もうひとつは体験することに重点を置いた「体験のワークショップ」と言えるものである。

ブロンズの彫刻作品を制作するには素材となるブロンズを型に流し込むという工程を必要とする。例えば，粘土を使い制作された彫刻作品を石膏で型にとり，その石膏型を使って，ブロンズの彫刻作品を制作するのである。このワークショップでは有限会社山岸鋳金工房のスタッフであり，かつ彫刻家でもある伊藤一洋に鑞を使った原型の制作を依頼，それを型にとり，石膏型を製作してもらった[23]。この石膏型にブロンズを流し込むという工程を当館に持ち込んで，来館者に体験してもらったのである。そのためには，溶解炉を当館に設置し，坩堝を約1200℃に熱し，インゴットのブロンズを溶解する必要があった。伊藤によって溶解炉に火が入れられ，30分程かけて，ブロンズを加熱していった。坩堝の中で1200℃に達するその様子や，その際に発せられる熱を来館者には間近に見学，体感してもらった（図9）。

⑧森のスケッチブックは，スケッチブック，ノートブック，ファイルノート，ルーズリーフ等の製造販売，画材用品の輸入販売[24]を手がけるマルマン株式会社の協力のもと製造された当館オリジナルのスケッチブックを使ったワークショップである（図10）。スケッチブックといっても，無地の画用紙が綴られているのではなく，24枚の画用紙が綴られてできた48ページ全てにデザイナーのぐちようこ[25]によってデザインされた当館の作品や風景，そして当館が立地する箱根をモティーフにしたシンプルなデザインが施されている（図11）。これらのデザインがワークショップ参加者のイマジネーションを刺激するヒントになっているのである。デザインに刺激を受けた参加者は，用意された色鉛筆や色紙などを使って，それぞれのページを思い思いに仕上げていくので



図 8 「森のスケッチブック―彫刻の森美術館でのスケッチ体験―」ポスター

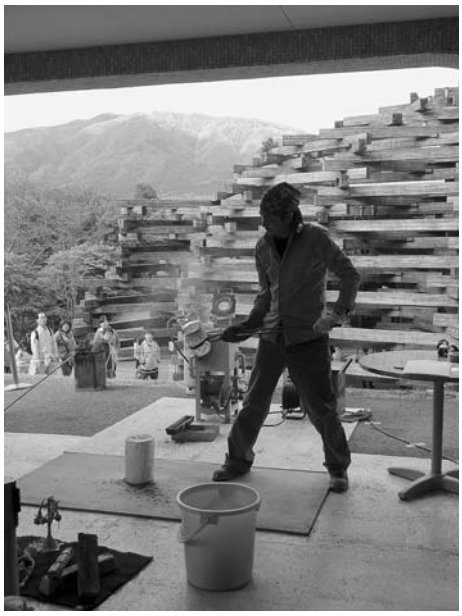

図 9 体験ワークショップ（講師の伊藤一洋氏）



図 10 「図案スケッチブック One Day 彫刻の森美術館 ver.」表紙



図 11 「図案スケッチブック One Day 彫刻の森美術館 ver.」デザイン最終案

ある。

「コレクションへのフィードバック」「失敗を許容する」「主産物は体験」

⑧森のスケッチブックについてはさらに後述するので，ここからは２つの特別ワークショップを企画する上で，筆者が心がけたことをいくつか紹介しておきたい。そして，それは筆者がインターンシップの中で，インターン達に折に触れ，繰り返し伝えていることでもある。

２つの特別ワークショップの内，特に②ブロンズペンダントに顕著に見られるのが「コレクションへのフィードバック」という視点である。このワークショップへの参加以前と以後で，参加者の中にはブロンズを使った彫刻作品への鑑賞体験に，質的な変化がおそらく起こっているだろう。作業中に参加者が自らの手に，ブロンズの重さを感じたのであれば，作品の重量について思いを巡らせるであろうし，自らの手に，その固さを感じたのであれば，作品の強固さについて思いを巡らせるであろう。さらにブロンズが溶解する様子を見たのであれば，坩堝の中で液状になったブロンズと，冷えて固まり彫刻作品となっているブロンズとの違いに驚くのではないだろ

うか。1200℃の熱で近づけず，ましてや触ることすら許さないブロンズが，例えば柔らかな造形をもつ作品となって，その手に触れたくなるような親近感を演出することにきっと驚くのではないだろうか。

また，2つの特別ワークショップの会場ではたくさんの成功と失敗が繰り広げられている。それは②ブロンズペンダントの会場でも，⑧森のスケッチブックの会場でも同様である。そして，その成功も失敗も参加者のものであるし，その中で参加者になにより大切にしてほしいのは失敗をすることである。成功よりも失敗から人は多くを学ぶものだが，ワークショップにおいてもそれは同様である。「失敗する」機会を参加者から奪わないことを心がけている。その点においては参加者への対応として，技術的な指導をするインターンには，参加者の成功を確保するために，失敗を回避させるような先回りをした指導をしないように伝えてある。つまり，ワークショップ会場を「失敗を許容する」場にしたいのである。

そして，2つの特別ワークショップに限らず，全ての特別ワークショップで心がけているのは，「ワークショップにおける主産物とは，制作物ではなく，制作の過程で得られた体験である」ということである。基本的には造形を体験することを主眼にしているので，ワークショップ参加者は制作物を作り上げることを目的にしているし，それ自体は参加者の視点から見れば，間違ってはいない。ただし，提供する側である当館の視点に立てば，制作物を作り上げてもらうことを目的としているのではない。その制作を通して得られる特別な体験をワークショップ参加者が獲得することを，あくまで目的としている。つまり，制作物の出来不出来というのは実は大きな問題ではない。勿論，不特定多数の来館者が参加するワークショップなので，誰が参加してもある一定レベルの制作物が出来上がるようにプログラムをつくりあげている。その点において，②ブロンズペンダントは伊藤が制作した鑞原型やブロンズという素材そのものが一定程度の造形のレベルを既に担保しているし，⑧森のスケッチブックはマルマン株式会社が提供するスケッチブックの質や，のぐちが施したデザインが同様の働きをしてくれている。いや，もっと積極的に言及すれば，伊藤の鑞原型やブロンズが持つ素材の力強さが，スケッチブックの質やのぐちのデザインが参加者の造形のレベルを引き上げてくれている。そのような担保をきちんと設定した上で，ワークショップでの制作物はあくまで副産物であり，その制作の過程で得られた参加者一人一人の体験そのものが主産物なのである。

5. インターンシップが提供すること　インターンに望むこと

「実」を重視

インターンシップがインターンに提供するのは，当然のことながら研修，つまり「実習」である。さらにこれもまた自明のことであるが，その最も重視する点は「実」である。実習とは「実地または実物について学習すること」（『広辞苑』）であり，この場合の「実地」とは「現場」である。本インターンシップにおいては，その現場とはまさに当館「彫刻の森美術館」であり，そこでインターンが体験すること全てが実習となる。だから，なにも特別なカリキュラムを準備するわけではない，例えば筆者が実務として行っていることを，ほぼそのまま行ってもらうのである。逆説的ではあるが，特別なカリキュラムではないことが，インターンに提供できる特別なカリキュラムになっているのである。インターン以外，例えば職員やアルバイトは当館の中で実務を行っているという環境下で，筆者が担当する教育普及事業および関連事業に携わることが，そしてその中で来館者と触れ合うことが，インターンにとってなによりの実習となっているのである。

インターンに運営を担わせる

本稿執筆時までのインターンシップの現場は前述の通り，特別ワークショップである。では，そこにどのように実習としてインターンが関わっているのか。結論から述べると，特別ワークショップの運営を担わせている，ということになる。インターン達の中にはリーダーがいるが，彼ら彼女らが中心となって特別ワークショップを運営している。といっても，その全てではない。勿論，特別ワークショップの企画立案，予算の確保，材料の調達，協力企業との折衝などは筆者が行う。そこから先の会期中，つまり「会場運営」をインターン達が担うのである。そして，この会場運営には事前準備と，事後の撤収も含まれる。

では，会期中の１日に限って，インターン達による会場運営を追ってみよう。ちなみに１日当たり 5〜7 名のインターンが運営に参加している。先ず参加者を迎える準備をする。事前準備などで会場の設営は終わっているので，リーダーを中心に当日の段取りを申し合わせる。会期２日目以降となれば，それまでに参加できなかったインターンの指導を，やはりリーダーを中心に行う。会場周辺では交代制で呼び込みを行い，来館者にワークショップへの参加を促す。ワークショップ会場に参加者が来場したならば，ワークショップの内容を説明し，参加料をいただく。その後，会場に案内し，その後は参加者への指導を，機を見て行う。また，参加者数の記録，その確認。参加者数の記録と参加料小計の照らし合わせを定期的に行う。受付時間を終えれば，その日の最終的な参加者総数と参加料総計の照合を行い，銀行への振込用紙に金額を記載する。記載した振込用紙を現金とともに当館の経理担当者まで運ぶ。最後の参加者が会場を出たことが確認でき次第，撤収がある最終日以外は簡単な片付けを行い，リーダーを中心にその日の反省会を行う。

ゴールデンウィーク中の特別ワークショップともなれば，参加者は１日当たり 100 名以上となることもある。その中でインターン達が対応するのは，その約 100 名だけではない。仮に約 100 名の参加者の大半が子供だった場合は，保護者がそこに加わる。親世代だけではない，祖父母世代も含めれば，インターン達が１日に対応する人数が一気に数倍になることは容易に想像できるだろう。美術館という緊張を強いられる現場で，１日数百人になる参加者とその関係者の対応をするということが，どれほどインターン達にとって大きな挑戦であるかはご理解いただけるのではないだろうか。そして，特別ワークショップの会場運営を担うということの実習効果もまたご理解いただけるのではないだろうか。

外部との連携

特別ワークショップの概要を概観していただいているので，それぞれの特別ワークショップに複数の協力企業が連携してくださっていることに気づいていただけるだろう。筆者の企画するワークショップにおいて，それらの協力は事業単体の収支を考えた時，運営上欠かせないものである。その上でインターン達に学んでほしいのは，美術館単独では実り多いものはできないという事実であり，そして，それを克服する方法のひとつが，筆者が行う企業との連携である，ということである。勿論，インターン達にはそれが唯一の方法だと言うつもりはない。あくまで筆者が実務家として辿り着いた方法のひとつである。

さて，ではインターシップの中でどのようにインターン達がこの方法に関与するのか。これまでリーダー達を中心に何度か実施しているが，それは共同執筆者の篠原の言葉を借りれば「企業訪問」ということになる。企業と協力関係を構築する上で，事前の趣旨説明や，協力していただくことでの企業側のメリットなどを説明する。その打ち合わせの席にインターン達を引率していくのである。インターン達が企業の会議室で同席するのは，部長クラス，中には取締役ということもある。つい最近行った企業訪問では監査役，そして代表取締役社長にご対応いただいた。また，この企業訪問を念頭にインターン達には名刺をつくることを義務付けており，当然のことながら初めての名刺交換を社長，取締役，部長を相手に行うということになる。自然と大きな緊張に襲われ，たどたどしく名刺交換する姿は滑稽ですらあるが，インターンにとってみれば，全てが必死である。企業訪問に初めて引率した際，打ち合わせを終え，その直後に感想を求めた際のインターンの一言は忘れられない。それは「打ち合わせ前半の記憶がありません。」というものだった。

複数リーダー制

インターンシップの事前説明会から伝えているのは，「頑張ること」と「無理すること」の線引きを明確にするということである。そして，それを制度として具現化しているのが「複数リーダー制」ということになる。インターン達にリーダーが存在することはこれまでの記述の中で明らかになっているが，そのリーダーは実は複数名存在する。試行錯誤の末，現在は大学のカリキュラムに比較的余裕のある学部４年生と大学院生が務めている。4 年生２名，大学院生３名の計５名である。

各インターンにはそれぞれ責任を持って，実習に参加してほしいが，過度の負担は禁物である。特に一人のインターンに負担が集中するという事態は確実に避けなければならない。その為に負担が集中しがちなリーダーを

複数名指名することで，その弊害を回避している。ちなみにこれまで実施した４つの特別ワークショップの内，前半の２つで４年生２名が，後半の２つで大学院の３名がリーダーを務めたので，この５名が現在のリーダーとなり，以降は彼ら彼女らを中心にインターンシップは運営されていく。リーダーの役目は多岐にわたる。筆者との連絡窓口を務める。インターン間の連絡網を整備し，連絡事項を共有させる。そして，なによりインターン達をとりまとめていくという重要な役目がある。それらを複数のリーダーで分担し，実施していく。例えば，責任を過度に負わせないという点では特別ワークショップ会期中の会計上の確認などはリーダーが複数で行い，各自確認した数字を互いに照合していく。それらの役割も偏ることのないように，交代して務めている。

6. 今後の展望　予定と可能性について

「晴れ着」から「普段着」へ

本稿執筆時点の予定では，残り２つの特別ワークショップを終えると，11 月からは作品解説をインターンに行ってもらう準備に入る。まずは筆者や他の職員が実施する作品解説を体験する見学会を設ける必要がある。そこで大まかに流れを確認してもらう。それと同時に読書会などの勉強会を開催する。例えば当館のピカソコレクションを解説するピカソトークを実施するのであれば，ピカソに関する書籍を選定し，インターン達とともに同じ書籍を講読する。そうすることで，ピカソやその作品についての共通認識を高めながら，インターン各自の作品解説を構築する力を養い，最終的には来館者の前でピカソトークを実施してもらう。

また，⑧森のスケッチブックをレギュラーのワークショップとして展開することを予定している。このワークショップの内容は年間を通して来館者に提供するプログラムとして構想しており，むしろ特別ワークショップという「晴れ着」に仕立て直して実施したというのが実情である。つまり，もともと想定していた「普段着」のワークショップをインターンとともにつくりあげていきたい，と考えている。スケッチブックにはエミール＝アントワーヌ・ブールデル《弓を引くヘラクレス》などの野外展示された作品や，ピカソ館に収蔵されているピカソの陶器作品をモティーフにしたページ，子供達に絶大な人気を誇る遊戯彫刻《ネットの森》のページもある。それらのページを使って，屋内外の展示場へプログラムを展開していきたい。

例示したピカソトークも，レギュラー化した⑧森のスケッチブックも繁忙期に行う特別ワークショップとは違い，派手さはないかもしれない。だが，教育普及事業の本質的な部分を正しく担うのは，このような一見派手さのない，地味な活動，その積み重ねではないだろうか。そういった意味では，そのモチベーションを「晴れ着」である特別ワークショップ以上に高めて，インターンには「普段着」の実習に望んでほしい。

インターンシップの対象事業を拡大

ここでは現時点での可能性について言及したい。主に次年度の取り組み，その可能性についてである。先ずひとつはインターンによるミュージアム IPM の実践である。IPM とは Integrated Pest Management：総合的有害生物管理の略であり，近年の美術館，博物館，図書館などでは，その虫菌害対策として化学薬剤を使った処置から，日常の管理を基本としたミュージアム IPM に転換されつつある。その潮流に乗り，このミュージアム IPM に取り組むところも増えてきた。先行例として九州国立博物館での実践[26]を参考に，当館でのミュージアム IPM を構想していきたい。ミュージアム IPM の実践には当館で働く職員，アルバイトに限らず，内外の関係者の協力も必要になる。であれば，内部の存在であると同時に外部の存在でもあるインターンが，このミュージアム IPM の実践，その一翼を担うことができればと個人的に考えている。

また来年度には筆者が企画したワークショップにインターンが参加するのではなく，インターンが企画から参加したワークショップを実施することができたらと考えている。本年度にも講師を招いたワークショップがあったが，次年度にもそのような形のワークショップを設け，その講師とインターンが協同してワークショップを企画し，実施する機会を作りたいと考えている。そこで注目したいのが本インターンシップでは当館での実習だけではなく，大学が設けるインターンの為の連続講座がもうひとつの大きな柱になっているということである。詳細は篠原に譲るが，その連続講座の中でデザイナーの齋藤名穂に第２回目の講師を務めていただいた。齋藤はそ

の活動の中でワークショップを行っており，この齋藤をワークショップ講師に，講座を聞いたインターンが企画から関わるという構図ができあがれば，それは実習と講座というふたつの大きな柱が相互に関係する素晴らしい取り組みになるのではないかと考えている。

以上，ここでは筆者の私案，篠原と筆者の試案に過ぎないものも含め，教育普及事業および関連事業という本年度の枠組みを超えながら，その可能性に言及した。

おわりに

つい先日の特別ワークショップで，その日の反省会をインターン達が行っていた。そして，いつものようにインターン達は課題を見つけては検討し，解決策を探っていた。インターン達が見つけた課題はとても小さなものから，とても大きなものまで，多岐に亘る。前者は実務においては検討するに値しないようなものもある。つまり，実務をこなし，経験を身につけていけば，検討を要することなく比較的容易に解決できる案件である。後者は見つけた課題があまりに大きすぎて，インターン達がやがてキュレーターに，いや社会人になって実力を身につけたとしてもただちには解決できないような案件である。それら大小様々な課題にインターン達は全力で取り組む，優先順位もつけずに，である。同じミスを何度も繰り返すなど，まだまだ未熟な彼らや彼女らは，自らの力を時には過信し，時には不信に思いながら課題を見つけ，取り組んでいく。やがて，見つけた小さな課題はその経験によって苦も無く解決されるだろう。一方で見つけた大きな課題は，その課題の本当の大きさに気づき，身震いするだろう。そして，篠原と筆者がインターン達と共に目指すのは，それら大小の課題を自らの力で，他者と協力しながら解決し，乗り越えていく次世代のキュレーターである。

本プロジェクトにはまだまだ多くの課題が存在する。勿論，その多くは初年度特有のものであったり，次世代の学芸員を育てるということに関する本質的なものであったりと，実に様々なものがある。そんな課題をひとつずつ乗り越えながら，またいまだ解決できずに抱えながら，ここまでの約半年間を進んできた。ただし，反省会を行うのはきっとまだ早いだろう。なにより主役であるインターン達の成長が見られるのも，年間スケジュールの後半を迎える，むしろこれからではないかと考えている。そして，その成長をきっと確認することができると筆者は確信している。単位認定もない本インターンシップに自らの意志で参加する姿は，なにかを学びたいと願い，行動する学生の本分を筆者に強く感じさせてくれる。そんな彼らや彼女らに筆者が学芸員の先輩として伝えられることは決して多くない。それでも指導する上でいつも心がけているのは美術館や博物館に携わる実に多種多様な業務があることを，そして，それを支える人々がいることを，ひとつでも多く，一人でも多く，本インターンシップの中で触れ，知ってもらいたい，ということである。それこそが若いインターン達になにより大きな変化を与えてくれるはずだからである。特別ワークショップの会場や，企業との打ち合わせの席上，そしてこれから迎える様々な現場での小さな出会いを，いつか大きな成長につなげてくれることを願ってやまない。

※　本稿は，2013 年度の東海大学「学部等研究教育補助金」による「博学連携によるインターンシップの実践と連携効果の検証」による研究成果の一部である。

注

［1］『新しい時代の博物館制度の在り方について』（これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議，2007）pp15-16.

［2］「箱根彫刻の森美術館」の名で親しまれる同館は 1968 年に開館，年間 48 万人が訪れる（2012 年度）。約 7 万平方メートルの敷地内に 120 点ほどの彫刻を野外展示する美術館は，オーギュスト・ロダン《バルザック》をはじめとする近現代の屋外彫刻を中心に，「ピカソ館」，「本館ギャラリー」など 5 つのギャラリーを有する。美術ファンをはじめ観光目的など，多様な来館者層に対応するインターンたちの主な活動の舞台は，敷地内にある「森のアトリエ」である。

［3］美術館担当者の小林俊樹とは，2012 年 6 月，屋外彫刻調査保存研究会による仙台昭忠碑（東日本大震災で被災）の保存修復活動を通じて知り合い，勤務先が同じ神奈川県内の近隣であること，美術史学や美術教育のあり方な

どをめぐり意気投合し，交流を深めた。

［4］インターンの「対象」は「東海大学学部生・大学院生・卒業生で，博物館学芸員課程履修者，もしくは学芸員有資格者」「学内の教員推薦（指導教官もしくは主任）があり，且つ，派遣元，派遣先，双方の担当者が適当と認めた者」で，「対象年次」は「不問」とした。また，「募集人数」は「初年次 15〜20 名程度」とし，「採用選考」は「提出書類（履歴書・レポート）と面接による審査，選抜」による。

［5］東海大学（湘南校舎）では，文学部全学科，教養学部芸術学科，工学部建築学科，理学部全学科（4 学部 22 学科・専攻・課程）が学芸員課程を開設している（2014 年度には教養学部人間環境学科自然環境課程が開設予定）。

［6］「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（文部省・通商産業省・労働省，1997 年 9 月 18 日）

［7］君塚仁彦，渡辺美知代，池尻豪介「博物館学芸員の雇用・労働をめぐる現状とインターンシップに関する一考察」（『東京学芸大学紀要：総合教育科学系』64（1），東京学芸大学学術情報委員会，2013）

［8］導入館の HP や募集要項などに基づきその「目的」を列挙すると，「美術館志望者に，美術館の教育普及活動を実地に習得してもらうこと。その活動の背景にある考え方を学んでもらい，美術館の現場で学芸業務に参画する機会を提供すること（ブリジストン美術館）」，「実務研修を実施し，西洋美術に関心を持つ人材の専門的知識および技術の向上を図ることをもって，当館の教育機能を発揮して社会貢献に寄与するとともに，西洋美術に興味関心をもつ人々の視野を広げること（国立西洋美術館）」，「学芸業務を実地に体験することで，研究上の専門知識を深めるとともに，明確な職業意識と勤労観を育て，今後の美術館活動を担う人材の育成に寄与すること（東京国立近代美術館）」，「将来の美術館活動および現代美術文化を支える専門的な人材の育成に寄与するため（東京都現代美術館）」などである。

［9］前掲書（註 5）参照。保存修復や広報，司書業務をインターンの業務内容の対象としている館や，教育普及活動ではインターンが特定の教育プログラムの企画立案から実施までを担うケースもある。また，教育普及や広報，図書などの部門では，大学の学部生もインターンの受入対象として許容される傾向も見られるという。尚，保険加入についてはインターンの自己負担とする館もあり，交通費についても支給されない場合が多いという。「キュレたま」では，交通費の一部と昼食（美術館で活動する場合に限る）を美術館側が負担し，保険については大学側が別途加入している。

［10］2013 年 4 月 20 日に本稿共同執筆者の小林とともに，広瀬浩二郎とその友人の斉藤名穂，大髙幸とお会いする機会を得た。会話のなかでユニバーサル・ミュージアムに関するシンポジウムの話が持ち上がったのが，今回の企画の発端である。

［11］講師プロフィール　広瀬浩二郎

1967 年，東京都生まれ。13 歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000 年，同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史，障害者文化論。01 年より国立民族学博物館に勤務，現在は民族文化研究部准教授。『さわる文化への招待』『さわって楽しむ博物館』『さわっておどろく！』などの著作を通じて，柔軟な障害者観とユニークな博物館論を展開している（チラシより）。

［12］講師プロフィール・斉藤名穂

2003 年早稲田大学理工学部建築学科卒業／ 2008 年ヘルシンキ芸術デザイン大学空間家具デザイン学科修士課程修了／主な仕事　東京国立博物館触知図，なかがわら保育園（NASCA/ 家具デザイン担当），群馬県立近代美術館赤のさわるコレクション，'Play Paper Scissors'展（フィンランド・アアルトミュージアム），フィンランド視覚障害者協会総合施設（IIRIS）触知図（チラシより）。

［13］講師プロフィール：大髙　幸

アート・エデュケーター　放送大学客員准教授（2012 年〜博物館教育論）

教育資源としての博物館の意義と課題を研究している。1997 年，慶應義塾大学文学部（美学美術史学）卒業。2000 年，ニューヨーク大学大学院にて修士（美術館運営学）取得。2007 年，コロンビア大学大学院にて教育学博士（美術教育）取得。12 年間の米国滞在中，メトロポリタン美術館などの教育部インターンとしてプログラム・アシスタントを務める。イサム・ノグチ美術館などで教育プログラム実施。グッゲンハイム美術館などで役職員研修実施。専門分野：美術館教育，美術館運営学，芸術メディア論（チラシより）。

［14］入学したばかりの大学 1 年生が聴講することも想定しており，博物館の活動や学芸員の仕事に興味，関心を持ちはじめた 1 年生が積極的に参加するように周知徹底も図った。「博物館概論」などの基幹科目の履修段階から，このようなテーマに関する講演会を聴講することが重要であると考えている。

［15］「インタビュー：美山良夫（慶應義塾大学文学部教授）」（福原義春編『100 人で語る美術館の未来』慶應義塾大学出版株式会社，2011）参照。

［16］東海大学の創立者・松前重義は，「現代文明論」という講義のなかで，「平和」「人種」「階級」の 3 つ問題の解決こそが，現代文明における最重要課題であるとし，絶えず歴史の教訓に学びつつ，正しいものの見方，考え方の上にたって，自らの信念を築きあげていってほしいと学生に語りかけていた。

［17］いずれも，次世代のミュージアムにおける機能連携のあり方を模索する上で注目されている視点でもある。財団法人地域創造『これからの公立美術館のあり方についての調査・研究報告書』（2009）などを参照。

［18］美術館や学校教育の現場でワークショップの実績のある造形作家の斉藤眞紀氏や，公開連続講座の講師も務めた斉藤名穂氏などをお招きし，インターンとともに創るワークショップの実践である。

［19］同プロジェクトを取り上げた読売新聞記事「難病の子 アートで活力（2013 年 3 月 30 日附）」によると，同病院の小児科病棟には白血病，腎臓病などの子どもたち約 30 人が入院しているが，感染予防のため面会者は親などに制限されおり，子どもたちは社会から隔絶されがちで，孤独感からつらい治療に耐えられなくなるケースが少なくないという。尚，同プロジェクトの運営母体は，今後は NPO 法人に移行予定である。活動内容等については以下の HP を参照（http：//kidsartproject.jp/）。

［20］尚，本文中の今後の取り組みは，「キュレたま」の事業の一環として展開するので，東海大学と彫刻の森美術館双方の担当者が緊密に連絡を取り合い，調整しながら具体的な計画を進めるよう心がけている。

［21］①自ら考える力は，必要に応じて適切な方法を選択して情報を収集する「学習力」，事実に基づいて客観的に情報をとらえ，本質的な問題を見極める「思考力」，ものごとや問題に対して疑問を持ち問題の原因や本質を知ろうとする「探求力」などから構成される。②集い力は，相手の考えや思いを理解しながら，自分の考え，意見も伝えることができる「コミュニケーション力」，多様な価値観を理解して受け入れる「関係構築力」，自分や周囲の役割を理解し，互いに連携・協力してものごとを行える「アイデンティティ獲得」などから構成される。③挑み力は，物事に対して挑戦的に取り組み，問題や解決を発見する「問題発見力」，問題解決に向け具体的な方法を考え企画する「構想力」，ゴールイメージを明確にし，目標を立てることができる「プランニング力」などから構成される。④成し遂げ力は，目標の実現に向けた効果的な行動計画やシナリオを描く「工程管理力」，目標の実現に向け行動を起こし，実現するために動き続ける「実行と継続力」，状況の変化に対応して計画や解決策を改善していく「分析と修正力」などから構成される。

［22］財団法人彫刻の森美術館『彫刻の森美術館　美ヶ原高原美術館　ガイドブック』1994 年

［23］伊藤一洋（有限会社山岸鋳金工房スタッフ・彫刻家）略歴

1997 年　武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業

有限会社山岸鋳金工房にて美術鋳造に従事しながら，彫刻家としても活動。

hpgrp GALLERY TOKYO（東京）等で個展，グループ展多数。

［24］マルマン株式会社ホームページ「会社概要」「事業内容」より

［25］当館のオリジナルスケッチブックはマルマン株式会社の商品「図案スケッチブック One Day」の当館 ver. である。現在，「図案スケッチブック One Day」は vol.1〜vol.3 まで販売されている。そのデザインを担当しているのが，のぐち氏である。

［26］文化財修復学会第 35 回大会実行委員会編集『文化財修復学会　第 35 回大会 in 仙台 研究発表要旨集』2013 年 pp134-135. 本田光子・森田稔・三輪嘉六（九州国立博物館）「ミュージアム IPM の実践と課題」pp172-173. 本田光子・上野知彦・秋山純子・山崎久美子（九州国立国立博物館）吉里忠良・鳥飼澄子（九州国立国立博物館環境ボランティア）「市民ボランティアによる文化財 IPM の発信について－九州国立博物館環境部会の取り組み－」pp174-175. 秋山純子・山崎久美子・今津節生・本田光子（九州国立国立博物館）新原茂春（NPO 法人ミュージアム IPM サポートセンター）川越和四・櫻井伸一（イカリ消毒株式会社）「博物館での飲食を伴う場所における IPM 活動について」などを参照。